

## イクボス モデル 01



白井 正彦

学校法人  
東京医科大学  
理事長

東京医科大学卒業  
東京医科大学博士課程修了  
博士（医学）  
2013年より現職

### これまでの道のり

疎開先の下田で黒船祭りにペリーの役で劇に出たことがきっかけで外交官になりたいと思っていましたが、周りの勧めもあり中学の頃には医者をめざすようになりました。内科に進むつもりが、大学4年のクラス旅行で主任教授の背中を流しているうちに、眼科に進むことになりました。免疫研究が大きく変わり日本で初めての実験的ブドウ膜炎の研究に取組み、夢中で研究をしました。眼科は女性の多い分野でしたが、本学では少なく、私が入室した当時は女性が2名だけでした。有能な女性医師で同じ権利を持ってしっかり働いていました。その後、教室員の1/3が女性になりました。自分の思いとは別の道でしたが、眼科医となり眼科主任教授、学長、理事長と進んだ道は幸運でありこの選択に仕向けてくれた多くの方々に感謝しています。

### ご家庭での生活

薬剤師だった妻は専業主婦となり、私は朝出たら夜遅くまで帰ってこない、最悪の夫だったと思います。ただ、運動会や学芸会など子どもの学校行事には必ず行くように努力しました。子どもは6歳ずつ離れて3人、みんな医者になりました。末っ子の長女は去年、結婚をしましたので、これからいろいろな意味で制約も出てくると思いますが、応援しています。

### ボスとして大切な仕事はどのようなことですか？

2016年4月に本学は100周年を迎えます。一体感のある大学、病院運営をしたいと考えています。臨床は縦割り組織ですが、人が横串になって、大切なことはみんなが知っているという組織を目標にしています。いろんな職種が集まる討論会など場を作ってコミュニケーションを図ります。また、将来に役立つものは研究しかありません。一人でやれる研究はありませんし、チームで研究をすると大きな研究になります。研究の面白さをみんなに感じてほしい。基礎研究に臨床研究が加わり、医学に対する何かを見つけることに全員がかかわってほしいです。そのために良い導きをする研究リーダーを作っていきます。海外での研究も教員の身分を2年から4年まで長く残しておくよう留学期間を変更します。

### 組織として仕事をシェアする仕組みが必要

医師に占める女性の割合が3割まで増え、若い世代ほど女性が多くなりました。国の財産、社会の財産、本学の財産である女性医師の力を借りないと組織として成り立ちません。一方、病院は24時間動いていますが、24時間働くというのは無理です。ましてや育児や介護がある人には働くことのできる時間帯が限られています。勤務時間を分けて、ある部分を担うという働き方を作り、仕事をシェアしないと組織としてやっていけなくなります。8時から12時までの4時間、12時から20時までの8時間など、いろいろなシフト制やワークシェアの仕組みを作り女性医師に働いてもらえるような組織づくりを始めます。同時に勤務時間に対して綿密な打刻制で評価をしていきます。

### 女性研究者支援は狭めることなく続けていく

本学でも女子学生、女性医師が多くなりましたが、その人たちの働く世界が拡大していかない状況にあった時に、他学の取組から文部科学省の補助事業「女性研究者研究活動支援事業（一般型）」を知りました。私が学長の時に運よく採択を受けて平成25年度から支援事業に取組みました。女性の活躍を進めるためには継続して働き続けること、それによって能力に応じた職位に就けるようにすることが必要だと考えています。女性活躍を進めることに熱い思いがある医師・学生・研究者支援センター長の下、多くの支援事業を構築し、効果を上げてきています。せっかく上げてきた成果ですから、ここで止めるわけにはいかない。支援事業を狭めることなく継続していきます。私も応援しています。

## 24時間動いている職場だから、仕事を時間でシェアできる組織づくりを目指す

### 未来の女性研究者への応援メッセージ

#### 周りが助けてあげたくなるような一生懸命さを大切に

まず、自分の興味にあった研究に進むこと、良い指導者を見つけること、それから一回は海外に行って研究をしてほしいと思います。医師になろうと思って選んだ仕事だから自覚して一生懸命やってほしいです。子どもが生まれ時間が取れなくなる時期も来るでしょうが、歯を食いしばって乗り切してほしい。女性だからと甘えるのではなく、できることはやって周りが「助けてあげたいなあ」と思うような姿を見せて両立してほしいです。

